

カントは、理性的存在者の特徴のひとつとして「自分自身に対して目的を設定する」という能力を挙げている。われわれ人間を含めて理性を持つ者は、本能にのみ従うのではなく、自ら目的を立て、そしてその実現のために自ら手段を考案することによって目的合理的な行為を遂行する。『人倫の形而上学の基礎づけ』（以下、『基礎づけ』と略記）で提示されたこの特徴は、理性的存在者が「目的それ自体」、すなわち単なる手段としてのみではなく、常に目的としても扱われねばならない存在者と見なされる根拠として、近年では特に英米圏のカント研究者によってさかんに取り上げられてきた。たとえば C. コースガードは目的設定能力について、理性的選択を通してそれ以上遡及できないあらゆる価値の条件となるという点で無条件の価値を持つと解釈している(C. Korsgaard, 1996, pp. 122-124.)。

目的という概念は、カント倫理学を解釈する際に決して見逃すことのできない要素であるが、しかしこれまでの一般的な解釈においてはむしろ消極的に捉えられてきたと言ってよい。その主な原因はカント自身の叙述にある。周知のように、カントはただ定言命法のみを道徳的な命法として認め、「ただ別のもの[=目的]のために手段としてのみ善い」(GMS: IV414)¹のような行為を命じる仮言命法は道徳性の原理たりえないとして退けた。これは「目的それ自体」に関しても、また「純粹実践理性の客体であり究極目的である最高善」(KpV: V129)に関しても当てはまる。カントによれば、意志規定においてはあくまで道徳法則が先立たねばならない。たとえ道徳的な目的であっても、そのためにではなく、そのような目的を促進すべしという命令に従ってなされることで初めて、われわれの行為は道徳的に善いものとして認められるのである。

しかし同時に、目的は「意志の自己規定の客観的根拠」(GMS: IV427)であり、また意志は「目的の能力」(KpV: V59f.)であるように、カントにとって目的概念は意志と分かちがたい関係を持つものでもある。さらにカントのテキストを紐解くと、後期の思想において目的概念はカント倫理学にとってますます重要なファクターとして位置づけられているように思われる。例として、『たんなる理性の限界内の宗教』における「道徳からは目的が生まれてくる」(R: VI4f.)という主張、そして『人倫の形而上学』における「同時に義務である目的」(MS: VI381, usw.)といった概念を挙げることができる。

こうした事情にあって本論文が問題とするのは、理性とともに感性を備えているという点で特殊な存在者であるわれわれ人間が設定する目的は、カント倫理学においてどのような意義を持つかということである。理性のいかなる命令をもってしても決して取り除かれることのない傾向性の要求に影響される人間が目的を設定するということは、具体的にどのような行為であり、そしてそれによって設定される「人間の目的」(GMS: IV431)はどのように位置づけられるのか。これらの問題を明らかにするため、本論文は、まず『基礎づけ』における「個別的意図」や「相対的目的」の概念を手がかりに人間の目的について概観し、次に『人倫の形而上学』を中心に検討しつつ、人間における目的設定の内実を「自由な活動」および「選択意志」の概念との関連において明らかにする。そして最後に、人間の主観的な目的が道徳の実践において不可欠な位置を占めていることを示す。

¹ カントからの引用はアカデミー版カント全集の巻号と頁数を文中に記す。